様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　24 年　5 月　10 日現在

機関番号：１２３０１
研究種目：基盤研究（Ｂ）
研究期間：２００９～２０１１
課題番号：２１３２００５４
研究課題名（和文）亡霊たちの近代――アイルランド小説通史

研究課題名（英文）Ghostly Modern: A History of Irish Novels

研究代表者
吉川　信（KIKKAWA　SHIN）
群馬大学・教育学部・教授
研究者番号：７０２４３６１５

研究成果の概要（和文）：今回の研究は、所謂ゴシック小説と呼ばれる作品も含む、近代アイルランドの＜亡霊＞物語を、通史的に扱うものであったが、これによって、アイルランドの近代小説のほとんどが､それを担ってきたアングロ=アイリッシュの作家たちの消し難い歴史的責任の意識に彩られている事実が明らかになった。歴史的に簒奪者と呼び得る彼らは、植民地アイルランドを近代国家へと成長させる責任を負い、自責の念に捉われつつも土着のゲーリック＝アイリッシュに文化的ヘゲモニーを渡すことは拒否せざるを得なかった。合法性を欠いたこの文化的指導者たちの意識が、亡霊に憑依された多くの歴史物語を生む。こうしたアングロ=アイリッシュの作家たちの文学遺産が、亡霊譚――アイリッシュ・ゴシック――という形式で、カトリック主流の現代作家（とくにジョイス）にまで受け継がれて行く過程が明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：The aim of this research is to follow the history and tradition of the ghost stories or Gothic novels especially of 19th and 20th century Ireland. The tradition of English novels in Ireland has, of course, been established by Anglo-Irish writers. As the British came to Ireland, they were originally usurpers, and we cannot fail to perceive the awareness they held of their responsibility; responsibility for creating a new modern nation as well as its own culture. Bearing, so to speak, the guilt for what previous generations had done, they could not but feel it their own duty to make Ireland into a modern nation-state. Although they refused to hand over their cultural hegemony to the Gaelic-Irish, their consciousness of their lack of legitimacy induces them to write many fictions haunted by ghosts, which might be a sort of embodiment of their repentance. This research could bring to light the fact that the ghost stories of 19th century Ireland is a cultural heritage of the Anglo-Irish writers, and after the Irish Renaissance, the heritage was succeeded, in turn, to Gaelic-Irish writers, especially James Joyce.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	2,400,000	720,000	3,120,000
２０１０年度	2,000,000	600,000	2,600,000
２０１１年度	2,000,000	600,000	2,600,000
年度			
年度			
総　計	6,400,000	1,920,000	8,320,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学

キーワード：アイルランド、小説、亡霊、ゴシック、近代

１．研究開始当初の背景

この研究の学術的背景として、一つには、「亡霊に対する不安」を論じたジャック・デリダの論考(Jacques Derrida, *Spectres de Marx: l'État de la dette, le travail du deuil et la nouvelle Internationale*, Paris: Galilée, 1993：邦訳『マルクスの亡霊たち――負債状況・国家、喪の作業、新しいインターナショナル』藤原書店 2007 年)がある。もちろんそれは、第一義としてマルクスの述べた「共産主義の亡霊」であったが、世界中の多くの人々が、それを「実在性も現実性もアクチュアリティも持たぬ亡霊」として払拭しようとする心情は、19 世紀当時におけると同様現在においても、「未来」に対する不安にほかならない。「亡霊」とはすなわち、「未来において、それが再来せぬようにしようではないか」、「それは過ぎ去った＝死んだのだから、再来を許してはならない」、とされる対象である。ここで論じられる「亡霊性」(spectralité)とは、安心をもたらす現在の秩序への疑い、現在のアクチュアルな現実と、そうではないもの(それは過去に属すると同時に未来に属するものでもある)との境界線に対する疑いを、始動させるもの、と考えることができる。

翻って、小説における登場人物とはなにか？　虚構の物語が喚起してきた不安とはなにか？　作家たちは、自己の経験と歴史(＝物語)を過去として(単に過ぎ去ったものとして)葬り去ることができず、したがって未来には再来するかもしれない不安として、虚構の物語に組み換えて行くのではないか。この点は、たとえばシェリダン・レファニュやブラム・ストーカーの小説(Bram Stoker, *Dracula*, 1897; J. Sheridan Le Fanu, *The House by the Churchyard*, 1863)に跡づけることができよう。19 世紀アイルランドにおいて没落の途上にあったプロテスタント・アセンダンシーは、怪奇小説という形で「人間」ならざる存在を現出させ、同族の人々の不安を(おもに現状のヘゲモニーに対する不安を)喚起したと考えられる。いわば「亡霊」は、これに出会ったハムレットのことばを借りれば、「蝶番の外れた時間」(“The time is out of joint,” *Hamlet*, I-5)、現前の秩序を揺るがす現在性――それは実のところ、つねに過ぎ行く過去と巡り来る未来の中間でしかなく、留め置くことは不可能である――のなかにある。登場人物の持つ「亡霊性」は、とりわけ政治的動乱期(19 世紀半ばから 20 世紀前半)のアイルランド小説において、明確に跡づけることができるに違いない。

まずは以上の思いが、研究の背景としてあった。

２．研究の目的

本研究では、近代からモダニズムの時代に至るアイルランド小説の本質を、「亡霊」の表出に着目することで明らかにすることを目的とした。具体的には、以下の三点をあげることができる。

(1) 世紀末とモダニズムの連続性を明示する――これまで、イェイツら世紀転換期に生きた作家たちに典型的に見られる神秘主義的心霊研究の流行は、20 世紀の懐疑的なモダニストたち――とりわけ高踏的モダニズム(high-modernism)と呼ばれる動向を主導した作家たち――とは無縁なもの、と捉えられてきた。この種の一般的な文学史観に対し、本研究は、神秘主義と心理学の関連を見据え(この点で Terry Castle の *The Female Thermometer* [New York & Oxford: Oxford UP, 1995]には重要な示唆を得た)、両者の連続性を浮き彫りにする観点を導入する。具体的には、たとえばイェイツの心霊研究とその成果である『幻想録』(*A Vision*, 1925; 1937)と、ジョイスの『フィネガンズ・ウェイク』およびその制作方法との間に、明確な連続性を抽出したい、と考えた。

(2) プロテスタント・アセンダンシーの文学史を提示する――アイルランドにおけるプロテスタントの支配階級は、19 世紀半ば以降、文化的ヘゲモニーを喪失する危機に直面していた。ダニエル・オコンネルによる「カトリック解放」(1829 年)は、以後着実に「カトリック中産階級」を育て上げて行く。いっぽう、19 世紀半ばのアイルランド文芸復興運動は、アイルランド民族の政治的独立を目した運動でもあったが、これを主導したのはやはり、文化的指導者を自認するプロテスタント・アセンダンシーであった。ここに、アングロ＝アイリッシュ民族とゲーリック＝アイリッシュ民族の確執が立ち現われる。前者の代表は W・B・イェイツであり、後者としてこの運動に背を向けたのがジェイムズ・ジョイスであった。現在われわれが目にすることのできる「アイルランド文学史」は、一般に、両者の対立よりもむしろ、その後の（「イェイツ以後」や「ジョイス以後」、あるいは「アイルランド自由国成立以後」の)多産な作品目録に注目しつつ、予定調和的な「国民文学史」を提供する傾向にある。だがここでしばしば見落とされるのは、19 世紀後半、まさに没落の途上にあったプロテスタント・アセンダンシーたちが、イギリスの読者・知識人階級に対して、どのような小説を提供していたか、である。ブラム・ストーカーやシェリダン・レファニュについては、これまでにも少なからぬ研究がなされているが、両者に関し

て、民族の政治的没落・斜陽の文学として捉えたものはきわめて少ない(Seamus Deane, *Strange Country*, Oxford: Clarendon Press, 1997 は、ストーカーを上記の観点から論じた斬新な一章を含んでいるが、網羅的なものではない)。さらに、この斜陽の民族としてのアングロ＝アイリッシュが、その後どのような物語世界を造形することになるかは、二次大戦後にも活躍したエリザベス・ボウエンの作品(*The Death of the Heart*, 1938 や *The Heat of the Day*, 1949 など)にまで、視野を広げて考察することが可能である。本研究は、これらの作家・作品に見られる「亡霊」たちに注目することで、一民族の権勢と没落の文学史が提供できるはずである、と考えた。

(3) モダニズム以後の現代文学における亡霊性を抽出する――モダニズム文学はしばしば、とくにマルキシズム批評の側から、その非ー歴史性を批判されてきた。だがフレドリック・ジェイムスンは、『ユリシーズ』が、語り手の「視点」という(ジェイムズ以来の)小説技法を、ひとつのイデオロギーとして揶揄している点に注目する(Fredric Jameson, "Ulysses in History," in Harold Bloom ed., *Modern Critical Views: James Joyce*, New York: Chelsea House, 1986)。「物語」の中心として機能する「視点」は、描かれる対象を物象化する方向に働く。その「徹底した物質性への執着」は、逆説的に、語り手主体の「安寧と満足」を揺るがすのである。

ここにおいて、デリダの語る「亡霊性」は、今一度モダニストの技法を照射する鍵となり得る。彼らが描き出した虚構の人物たちは、「小説」が今まさに非現実の余興として等閑に附されつつあるとき、「実在性も現実性もアクチュアリティも持たぬ亡霊」として、人々の背後に呼び出されるのである。この問題を考察することで、本亡霊研究は、現代小説にまでその射程を敷衍して行くことができる、と考えた。

３．研究の方法

歴史的な分析を行うにあたっては、18 世紀後半の「ゴシック・ロマンス」との関わりも視野に収めねばならないため、初年度はもっぱら 19 世紀の作家・作品のあり方を、前世紀との関連において俯瞰し、アイルランド(文化)の変容過程に留意しつつ、作品が登場した歴史的必然性を考察することとなった。これを土台として、次年度には 19 世紀末の世紀転換期文学とモダニズム文学の関係を、最終年度にはモダニズムとこれ以後の現代文学との関係を探り、いずれにも登場する「亡霊」を鍵に、考察を進めた。

研究代表者、ならびに研究分担者が、毎年個々に研究論文や翻訳を発表すると同時に、年間 2 度(第二年度は 3 度)研究集会を開催し、各人が取り組んでいる問題に関して口頭発表を行ない、問題意識を共有することに取り組んだ。

４．研究成果

(1) 初年度は、「ゴシックの伝統と近代小説」を主題とし、以下の作家を中心に併記の問題点を考察した。近代小説の誕生を見た 18 世紀の作品、なかでも Horace Walpole (1717-97), *The Castle of Otranto* (1764) や Ann Radcliffe (1764-1823), *The Mysteries of Udolpho* (1794)などのゴシック・ロマンスを参照しながら、19 世紀の Joseph Sheridan Le Fanu (1814-73)に受け継がれる「近代リアリズム」と「亡霊」の関係に考察を加えた。本来「近代市民社会」を「写実的」に描くことが小説の目的であったとすれば、そこに異物として混入してくる「亡霊」はどのような意味を持っていたのか。たとえば『ハムレット』において主人公の行動を支配できた「亡霊」は、近代市民社会においてはおそらく、同様の力を発揮できない。ならばこの科学の時代、知性の時代に、「亡霊」はどのような形で読者層を捉えることができたのか、を論じることになった。

(2) 第二年度は、「世紀転換期のファンタズム」を主題とし、以下の作家を中心に併記の問題点を考察した。Bram Stoker (1847-1912)による *Dracula* (1897)は、(Seamus Deane, *Strange Country* [Oxford: Clarendon Press, 1997]に指摘されているように)不在地主の物語として読むことが可能である。ドラキュラ伯爵は、夜明け前に自らを埋葬するための「土」が棺のなかに供給されないことには、ロンドンに居住することができない。この土を彼は、文字どおり棺桶船と呼ぶべき船でロンドンに運び込む。だがこの作業は夜明け前までに完遂されねばならない。まさに「ケルトの薄明」というナショナリズムの夜明けこそが、彼の弱点なのである。プロテスタント・アセンダンシーたちの「土地」もまた、「薄明」とともに徐々に失われて行く運命にある。いっぽう、Oscar Wilde (1854-1900)は怪談のパロディとも言える中編小説 "The Canterville Ghost" (1891)を執筆している。「亡霊」を舞台俳優に見立てたことはワイルドの慧眼であり、ここではそれが、もはや観客の興味をそそらない過去の遺物とされている。ここにもまた、排除されるドラキュラと同種の悲劇を見て取ることができた。またこの世紀転換期には、アイルランドで幼年期を過ごした Lafcadio Hearn (1850-1904)が活躍している。アメリカのジャーナリストとしてマルチニーク島で妖怪伝説を蒐集・翻案、その後日本に渡り古来の怪談を広く英語圏に紹介したことは知られているが、その超自然的な世界への傾

倒、「亡霊」に対する執着を、むしろ「ケルトの薄明」や妖精伝説との関係によって検討した。

(3) 第三年度は、「亡霊たちの現代」を主題とし、「モダニスト」と呼ばれる作家を中心に、現代の亡霊譚を研究した。「モダニスト」はおそらく、ある種の「ヨーロッパ人」もしくは「汎ヨーロッパ人」に与えられた名称である。そのため「アイリッシュ・モダニズム」は呼称として収まりが悪い。「モダニズム」が第一に喚起するイメージはまず「20年代パリ」であり、「国籍離脱者」もしくは「亡命者」であり、パトロンに庇護された芸術家たちによる実験的な「高踏芸術」(high-art)である。だが近年ではその「モダニズム」が、同時に「ナショナリズム」というおよそ「汎ヨーロピアニズム」とはそぐわないイデオロギーに密接している点も強調されている。それは、特殊であることが普遍に通じる、文学特有の逆説とも呼べようが、「モダニズム」は、「汎ヨーロピアニズム」がまさにその限界を露呈させたところから始まった点を忘れてはならない。イデアでしかなくなった「汎ヨーロピアニズム」は、芸術によってこそ建て直し得る――立て直さねばならない――という「高踏芸術」の使命が、彼らをヨーロッパの中心パリに集結させた。そして個々の作家が内に秘めた「特殊」は、「アイリッシュ・ナショナリスト」の James Joyce によって、もっとも見易い形で「普遍」に通じることになる。最終年度は、このような問題を抱えた「モダニズム」の動向を、ジョイスを中心に考察し、またジョイス以後のアイルランド作家たちが、「モダニズム」をどのように継承し、どのような形で自らの言語世界を構築して行ったか、を具体的に考察した。たとえば、はっきりと没落の途上にあったプロテスタント・アセンダンシー(アングロ＝アイリッシュ)の側には、しばしばイギリスの Virginia Woolf (1882-1941)と比較される、Elizabeth Bowen (1899-1973)が登場する。主要な作品が 30 年代以降に発表されている点から、遅れてきたモダニストとも、あるいはポストモダニストとも呼べようが、彼女の描く「亡霊」には、支配階級としての「過去」と「罪悪感」がはっきりと刻印されている。行き場を失ったかつての支配階級の、まさに「憑在」を表象する物語群であることがわかった。また現在活躍中のブッカー賞作家 John Banville (1945-)についても、「モダニズム以後」の現代小説に「亡霊性」の必然を辿ることができた。

以上の成果は、３年間という限られた期間に行われたものとしては、予想以上の進展が見られたと言い得るものの、研究目的に述べた、イェイツの『幻想録』とジョイスの『フィネガンズ・ウェイク』との関係については、(複数の『ウェイク』読解作業が並行して行われたものの)まだまだ検討の時間が必要であると思われる。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 10 件)

①吉川信、北の作家たち――「紛争小説」の現在――、群馬大学教育学部紀要　人文・社会科学編、61 巻、103-110、2012、査読有

②大島由紀夫、『フィネガンズ・ウェイク』第 3 部第 2 章の概要（1）、東京海洋大学研究報告、8 号、95-108、2012、査読有

③田多良俊樹、A Ghost That Cannot Speak Its Name: The Haunting Memory of the Great Irish Famine in James Joyce's "The Dead"、英文学研究支部統合号（九州英文学研究)、4 巻(28 号)、29-38(443-452)、2012、査読有

④吉川信、亡霊たちの近代――イギリス・ゴシック小説考(2)――、群馬大学教育学部紀要　人文・社会科学編、60 巻、145-158、2011、査読有

⑤大島由紀夫、『フィネガンズ・ウェイク』第 3 部第 1 章の概要、東京海洋大学研究報告、7 号、63-76、2011、査読有

⑥戸田勉、パーネルの亡霊――ジョイスとイェイツの場合、山梨英和大学紀要、9 号、69-83、2011、査読無

⑦田多良俊樹、Green English Racing Cars and 'the Mask of a Capital': Irish Coloniality in the Con/Text of 'After the Race'、Joycean Japan、21 号、5-19、2011、査読有

⑧吉川信、レ・ファニュの亡霊たち――*In a Glass Darkly*に見るアイルランド――、中央英米文学、44 号、19-34、2010、査読有

⑨吉川信、亡霊たちの近代――イギリス・ゴシック小説考(1)、群馬大学教育学部紀要人文・社会科学編、59 巻、77-87、2010、査読有

⑩大島由紀夫、ジェイムズ・ジョイスの『ユリシーズ』: 第 16 挿話「エウマイオス」の語り手、東京海洋大学研究報告、6 号、25-32、2010、査読有

〔学会発表〕(計 16 件)

①田多良俊樹、ポストコロニアル・ジョイス・スタディーズ概説、香川大学経済学部現代社会研究会、2012 年 1 月 18 日、香川大学

②田多良俊樹、「ベルファストの贈り物」、あるいは魔女の大飢饉―― "Clay" の政治性を再考する、日本英文学会中国四国支部第 64 回大会、2011 年 10 月 29 日、島根大学松江キャンパス

③桃尾美佳、‘The Distorted Vision’: Exile and Confinement in John Banville’s Novels、IASIL JAPAN, The 28th International Conference, Symposium 1: Wounds and Cures in Irish Literature、2011年10月8日、同志社大学
④田多良俊樹、亡霊のアイルランド――ジェイムズ・ジョイスを中心に（招聘講演）、日本ケルト協会ケルトセミナー、2011年7月3日、あいれふ講堂
⑤吉川信、ダブリンの亡霊たち――アイリッシュ・ゴシックの可能性、日本ジェイムズ・ジョイス協会第23回研究大会（シンポジウム「*Dubliners*の亡霊――彼ら死者の目覚めるとき」司会)、2011年6月18日、京都ノートルダム女子大学
⑥戸田勉、“Ivy Day in the Committee Room”における死者たち、日本ジェイムズ・ジョイス協会第23回研究大会（シンポジウム「*Dubliners*の亡霊――彼ら死者の目覚めるとき」)、2011年6月18日、京都ノートルダム女子大学
⑦桃尾美佳、自分だけの部屋― “A Painful Case” に見る不在の詩学、日本ジェイムズ・ジョイス協会第23回研究大会（シンポジウム「*Dubliners*の亡霊――彼ら死者の目覚めるとき」)、2011年6月18日、京都ノートルダム女子大学
⑧田多良俊樹、薔薇十字会員の亡霊――“The Sisters” とオカルティズム、日本ジェイムズ・ジョイス協会第23回研究大会（シンポジウム「*Dubliners*の亡霊――彼ら死者の目覚めるとき」)、2011年6月18日、京都ノートルダム女子大学
⑨桃尾美佳、夜明け前のヴァンパイア―『ドラキュラ』とアングロ・アイリッシュ小説、日本アイルランド協会2010年度アイルランド研究年次大会（シンポジウム「アングロ・アイリッシュを再考する―政治と文学」)、2010年11月27日、東洋大学
⑩田多良俊樹、その名を語り得ぬ亡霊――“The Dead” を「大飢饉小説」として読む――、日本英文学会九州支部第63回大会、2010年10月30日、九州大学箱崎キャンパス
⑪河原真也、『ユリシーズ』に登場するアイルランド（人）は搾取されていたのか？、日本ジェイムズ･ジョイス協会　第22回研究大会（シンポジウム「『ユリシーズ』とステレオタイプ」)、2010年6月19日、早稲田大学
⑫河原真也、J. M. シングと文化ナショナリズム、日本ケルト学会九州支部、2010年3月19日、西南学院大学1号館
⑬吉川信、亡霊たちのアイルランド――ゴシックの系譜（招聘講演)、中央英米文学会、2009年12月26日、成城大学32A教室
⑭桃尾美佳、アイリッシュ・ゴースト・ストーリー――エリザベス・ボウエンの世界（招聘講演)、専修大学人文科学研究所定例研究会、2009年11月17日、専修大学10号館
⑮桃尾美佳、アングロ･アイリッシュ文学（招聘講演)、基盤研究（A)「プラハとダブリン―20世紀文学の総括の試みとしての『二都物語』」平成21年度　第1回研究報告集会、2009年8月2日、蓮台寺荘会議室
⑯戸田勉、『若い芸術家の肖像』再読、日本ジェイムズ・ジョイス協会（シンポジウム「『若い芸術家の肖像』再読」司会兼パネリスト)、2009年6月20日、京都府立大学 大学会館

〔図書〕（計2件）
①城眞一・吉川信編、日本独文学会、日本独文学会研究叢書066プラハとダブリン――20世紀ヨーロッパ文学における二つのトポス――（吉川信「薔薇の外部――初期イェイツの象徴をめぐって――」、「あとがき」、戸田勉「ジョイスとユダヤ人」)、2009、総ページ数76（吉川2-14, 75-76, 戸田25-32)
②出口保夫他編、東京書籍、21世紀イギリス文化を知る事典（河原真也「アイルランド――もうひとつの島国」)、2009、総ページ数830（河原76-89)

６．研究組織
(1)研究代表者
吉川　信（KIKKAWA　SHIN）
群馬大学・教育学部・教授
研究者番号：７０２４３６１５

(2)研究分担者
大島　由紀夫（OOSHIMA　YUKIO）
東京海洋大学・海洋工学部・教授
研究者番号：１０１１３９９５
戸田　勉　（TODA　TSUTOMU）
山梨英和大学・人間文化学部・教授
研究者番号：９０２１７５０５
河原　真也（KAWAHARA　SHINYA）
西南学院大学・文学部・准教授
研究者番号：８０４５４９２４
桃尾　美佳（MOMOO　MIKA）
専修大学・経済学部・准教授
研究者番号：８０４４５１６３
田多良　俊樹（TATARA　TOSHIKI）
香川大学・経済学部・准教授
研究者番号：４０５１０４６７
研究協力者
小田井　勝彦（ODAI　KATSUHIK）
専修大学・非常勤講師
奥原　宇（OKUHARA　TAKASHI）
専修大学・文学部・教授
山内　玲（YAMAUCHI　RYOU）
香川大学・教育学部・准教授